生涯貴女を守ります

亜紅亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生涯貴女を守ります

【Ｎコード】
Ｎ１９５８Ｚ

【作者名】
亜紅亜

【あらすじ】
ある日おこった事件、特定の人物だけを狙う連続殺人だった。それはある男の逆恨みからくるものだった。その男にに蘭が狙われてーーーー？

1話

「ごめんな…蘭」
新一の悔しげな声が病室に響いた
新一の握っているシーツは引き裂かれんばかりに握られていた…

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

「「昨夜、女子高校生が男に刃物で襲い掛かられ重傷を負う事件がありました。警察の調べでは例の連続殺人犯によるものだと判明しました。
今までの被害者は共通点があり、皆死亡するまで犯行に及んでいることが分かりました」」

「…怖いね。新一」

蘭は工藤邸に訪れ二人でゆったりと日曜日を過ごしているところだった。

「そうだな。俺、昨日警視庁に行ったから目暮警部に聞いてみたんだけど…
その共通点が，空手をやってる，って事なんだよ」

「っあ、あたしもじゃない！」

「あぁ、空手をやっている女子高校生なら上手い、下手関係なく殺している。有段者の人も殺されちまったからな…」

新一は悔しそうに言った
その目にはいつも犯人を追い詰めるときなどの鋭い眼差しだった

「だから蘭も気をつけろよ。犯人がこの近辺にいないとは限らないんだからな」

「うん…」

蘭は明らかに不安そうだった

「大丈夫だよ。心配すんな！お前は俺が守ってやっから！」

そう言って蘭を抱きしめた

だが、この二人は恐怖を味わうことになる

互いの優しさが互いを傷つけあうなんて、知る余地も無しでーーーー

1話（後書き）

他にも連載あるんですが…
大丈夫です！
コレは結末もう頭の中にあるんで！
明日にでも終わるかもです！！！

2話

例の連続殺人犯のニュースを見た日から、新一と蘭は必ず登下校を共にするようになっていた

その日も学校から夕飯の食材を買うため、商店街を通りながら工藤邸へ向かっていた
さすがに町のあちこちに警官が大勢いた

新一らが歩いている商店街もそうだ

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

「っくっくっく…。見つけたぞ…。毛利蘭」

男は不気味に笑った
その手には空手経験者のリストが握られていた
住所から何まで。写真もついている

「まってろよ、桜。今すぐお前を貶めた悪魔達を、地獄へ落としてやるから。
…この俺がな」

ポケットから果物ナイフを取り出し、刺す、殺すタイミングをうかがっていた

警官の視線もはずれ、ターゲットはこちらに気付いていない
運良く一緒に居る男は俺のいる側にはいない

チャンスだ

と、足を踏み出そうとした瞬間過去がよみがえる

ーーーもう限界だよ！！！
ーーーなんであたしがこんなことにならなくちゃいけないの？
ーーー助けてっ！！！お兄ちゃん！！！！

……可愛い妹
俺は助けることが出来なかった
あいつは俺を信じて待っていたのに…！！！

自分の無力さに目眩がした

しっかりしろ。
まだ桜を苦しめた奴は分かっていない

……いや。苦しめた奴じゃなくてもいい
空手という、くだらないものをやっていた奴ならーーーー

思い直し、ナイフを握る力を込める

今日も俺の手は桜を苦しめた奴の血で汚れる

「うおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

「うおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

どこからか声が聞こえた

オオカミのうなり声のようなーーー腹のそこから出た声

声の先には例の連続殺人犯

警部から聞いた特徴とぴったり合致する

ナイフを持って蘭めがけて走ってくる

ーーーヤバイ！！！

そう思ったときには遅かった

犯人が振り翳したナイフは蘭の胸に、恐怖で動けない蘭の心臓の位置へと向けられていた

「蘭っ！！！！」

3話

もう駄目だ！
私…死ぬんだ

そう考え、目を堅く瞑った
しかし、どこにも痛みは無かった
恐る恐る目を開けてみると……

目に入ってきたのは腹から血を流した新一だった

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

「新一！新一ぃ！！！」

「っち。男のほうか…。畜生！！！」

蘭の胸目掛けて振り下ろされたナイフだったが、新一が来たことにより手元が狂い腹にいったのだ
そう言って犯人は逃げていった
そんな中でも新一の腹からはとめどなく血が流れていた

「っく…。ら…蘭、大丈夫だから…」

「何が大丈夫なのよ！！！なんで…あたしを庇ったのよ！」

「もう……んが、…くのは…だ…から」

もう言うこともはっきりしなくなっていき、終いには意識をなくしてしまった

「新一！新一！！！！！」

もう呼びかけても返事が無い
蘭に出来ることは、救急車が来るのを待つだけだった

○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●

「新一…」

見た目より新一の傷は浅く、命に別状はないという
だが、蘭の心についた傷はそんなに簡単に癒されるものではなかった
もう蘭の耳には新一が刺されたときから、何も聞こえていなかった

'新一が私のせいで,

そのことが頭から離れなかった

「新一……ごめんね。ごめんね…私の…せいで…っ」

頬を涙がつたう
もう、苦しかった
新一が自分のために怪我をしたり、危険にさらされるのが
精神的にも蘭はどん底に落ちてしまった

「ごめん…ね……」

4話

「…？」

「おぉ工藤君！気がついたか！」

「目暮…警部？どうしてここに」

「工藤君が刺されたと聞いて飛んできたんだよ！あぁ、大事に至らなくて良かった」

新一は何かの違和感を感じた

警部の様子、少し動揺している、それに俺の目をまっすぐ見ない

蘭もいない

あいつの性格なら俺がおきるまでいるはずなのに…

「警部」

「何だね？」

「もういいですよ。かくさずに言ってください」

警部がヒュッと息を吸い込んだ

「…まったく、君にはかなわないな」

「…蘭に何かあったんですか？」

「……」

「言ってください」

警部の口から発せられた言葉は俺の思考をとめた

「蘭君は精神科にいる」

4話（後書き）

今回は短い＞＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1958z/

生涯貴女を守ります

2011年12月11日18時49分発行